げられており、八四篇の論文を紹介している。前述の如く、南京大学明清史研究室編に係る『論文集』は、一九八一年に刊行されたものであるから、そこに収録されていた論文目録は一九七九年末までのものに止まった。そこで、研究者の便宜をはかるために、本書の編者はそれ以降に発表された論文の整理を意図したわけである。本目録には、一九八二年四月までに公表された論文を含み、私たちに最新の情報を与えてくれる。本目録を編纂したのは張華氏である。

以上の如き内容をもつ本書は、中国資本主義萌芽問題を考察する上に、絶対不可欠の重要文献である。而も本書に収められている論文は、前述の如く、すべて最新の論文である。中国における資本主義萌芽の研究動向を知るために、最も適当な論文である。而も中国学界内に存在する相対立する意見を展開した論文も、ここには併録されている。私たちは本書を熟読することによって、中国の研究動向を充分理解すると共に、これを土台として、わが国における資本主義萌芽研究を更に推進しなければならぬ。

付言すれば、本書を昨年秋、洪煥椿教授より恵送された。謹しんで洪煥椿教授の好意に感謝すると共に、健康を害しておられるという洪教授が、一日も早く元気を回復されることを祈ってやまない。

（A五判、四七八頁、江蘇人民出版社、一九八三年四月）

ブリジット／レイモンド・オールチン著

インド・パキスタンにおける文明の興隆

近藤英夫

南アジア考古学にとって、一九五〇・六〇年代は発見の時代であり、また、各地で数多くの発掘調査が展開された時代であった。それに対し、つづく七〇年代は、一連の発掘、成果の分析と、個別の考古学的テーマの分析とが押し進められた時代であった。こうした過去三十年の研究成果を綜合し、南アジア先史時代を再構成することが、近年強く要求されている。

本書は、このような状況下に著わされた南アジア考古学の概説書である。著者、ブリジット・オールチンと、レイモンド・オールチンは、専門領域を異にしながらも（ブリジットは石器研究を、レイモンドは南インドの新石器-金石併用期諸文化研究を、専門としている）、ともにM・ウィーラーなきあとの南アジア考古学界において、主導的役割を担ってきたイギリスの考古学者である。この二人は、一九六八年に『インド文明の誕生――前五〇〇年以前のインド

とパキスタン――』を著わしている。この書は、「物をもって語らしむ」という基本姿勢、広く南アジア全域を対象としていること、特定の時代に記述が偏っていないこと、などから優れた概説書として評価されている。

本書は、この『インド文明の誕生』を礎に、さらに七〇年代の成果をとりいれて加筆修正されたものである。概説の対象とした地理的空間・時間的枠組みは、二書ともに同じである。ただ本書では、『インド文明の誕生』の一つの特色であった個別テーマによる章だて（セトゥルメント・パターン、経済と農耕、工芸と技術、芸術と宗教）が姿を消し、時代に沿って、諸文化の概要とその相互連関とを詳述することに主眼が置かれている。全体は三部（第I部「構成要素」、第II部「インダスの都市成立」、第III部「インダス文明の遺産」）から構成され、各部はそれぞれ数章から成っている。以下にその概略を紹介する。

第一章　南アジアの考古学

本章は序章であり、右の三部構成の外におかれている。ここでは、七〇年代以降の南アジア考古学の研究動向が紹介されている。

第I部　構成要素

第二章　先史時代の環境

南アジア文化とは、「各々異なる文化的・技術的レヴェルにある集団が、その地域色や特徴を残したまま、かつ、相互のコミュニケーションを保有しつつ、ひとつの殻の中に包みこまれたもの」である。殻の中の各集団は、さまざまなかたちで環境に適応してきた。したがって、南アジア文化の理解には、地理学・地質学の理解が不可欠である。本章ではこのような視点にたち、南アジア諸地域の気候について、さらに、諸地域の地勢と古環境について概観されている。

第三章　最古の南アジアの人びと

旧石器時代を、前期、中期、後期の三時代に分けて概観している。

前期旧石器時代については、依然として資料の収集段階にある。しかし、この時代についてのT・T・パターソンの説は修正されつつある。一方、中期旧石期時代では、ネヴァサ文化（デカン、中央インド）、ルニ=インダストリー（アラヴァリ丘陵）、ローリー=インダストリー（インダス流域のローリー丘陵）という、石器組成の異なるグループが存在する。後期旧石器文化は、西インドに最初に出現し、以後、ガンジス流域、タール砂漠東縁部、中央インド、さ

らには南インドに拡がる。この時代、石刃技法が盛行するが、それは、ローリーやルニ=インダストリーがさらに発展したものと考えられる。近年、旧石器時代に関する研究は、石器組成、技法、石器原材などについて進展をみている。しかし、遺跡相互の比較研究とその統合は、なお今後の課題である。

第四章　狩猟-採集民と牧民

本章は、中石器時代を扱う。狩猟民、牧民、さらには初期農耕民の出現期である。

インダス水系に存在するこの時代の諸遺跡は、後世の定住農耕村落の先駆であり、そこにみられる石刃技法は、インダス文明やさらには初期鉄器時代にまで受け継がれている。一方、タール砂漠の東縁部で展開されたこの時代の文化展開からは、狩猟・牧畜がこの地の主たる生活手段であったことがうかがわれる。さらに、中央インドや南インドでも、環境に適応した文化展開がみられる。中央インドの岩壁画の多くは中石器時代に属し、往時の生活の様子を知るうえで貴重な資料である。また、大規模な石器製作址の存在や、石材の比較研究からは、この時期、各地に広範な交易ルートが存在したことがうかがわれる。

第五章　初期農耕村落

最初の農耕村落は、イラン高原の東縁部に出現する。インダス水系の西側丘陵部、メヘルガールの調査から、近年注目すべき成果が得られている。この遺跡では、先土器新石器期（I期。前八千年紀初期）から土器出現期（II期。前五千年紀）をへて、初期インダス期（VI期。前三千年紀中葉）まで、文化発達段階の連続性が確認されている。ここでは、I期末に、栽培化・家畜化が行なわれていたようである。これまで知られていた、バルーチスターンのキリ=グール=ムハンマド等の初期農耕村落の年代は、メヘルガールII期に並行する。また、メヘルガールIII期（銅器が出現する時期。前四千年紀中葉）に並行して、インダス水系の各地に農耕村落が確立する。

前三千年紀以降、南アジア各地で新石器文化が展開する。スワート流域やカシミールでは、前三千年紀にはいると、ブルザホムなどで独自の新石器文化がおこる。その他の地域、すなわち、インダス水系の東側、東インド、中央インド、南インドでも、同様に地方的な新石器文化がおこり、その技術伝統は長く保持される。

第II部　インダス都市の成立

第六章　初期インダス期

前四千年紀中葉、インダス水系の丘陵部には、メヘルガールをはじめ多くの農耕村落が存在した。この村落の発展による人口増加の結果、一部の人びとはインダス水系の氾濫原に移り住むようになった。インダス流域のアムリが、その最初の例である。少し遅れてコト=ディジの展開がはじまる。それ以降、氾濫原には、後のインダス都市モエンジョ=ダーロ、ハラッパーを含め数多くの集落があらわれる。これら集落には、栽培植物（コムギ、オオムギ）、家畜（ウシ、ヒツジ、ヤギ）、石刃技法、銅の使用など、多くの共通する要素がみられる。土器に関しては、最初の時期には強い地域性がみられるが、後にコト=ディジ式土器が支配的になる。

このような文化展開のみられる時期を「初期インダス期」（Early Indus period）と呼ぶ。初期インダス期の各遺跡の様相からは、地方色・地域色の強い文化が、斉一化していくさまがみてとれる。この斉一化の最頂点が、インダス文明である。斉一化は、信仰などの面にもみられる。ウシの角やボダイジュの葉を神聖視し、彩文のモチーフとしたことなどは、この時期の多くの遺跡に共通してみられる。

一方、バルーチスターンでも、初期農耕村落はさらに発展をつづけ、いくつかの遺跡では町邑が形成される。諸遺跡は、地域色の強い独自の彩文土器を持つが、その伝統は、前三千年紀末に頂点に達した。

第七章　インダス文明1

第八章　インダス文明2

著者はインダス文明を、㈠初期インダス期の諸文化が発展し形成されたものである、㈡インダス水系の地理的環境が文明形成を可能にした、㈢文明はインダス水系外の社会と絶えず接触・交流を保っていた、と結論づける。そしてこの視点から、第七章で都市の様相、交易、農耕などを概観し、つづく第八章で遺物とその技法、文字、信仰、墓制、年代の問題などを扱っている。

文明は、もとより農耕を基盤として成立したものであるが、文明圏の中には、都市の住民や農民の他に、遊牧・半遊牧の人びとも存在していた。文明社会で、特に交易に関して遊牧民の果した役割については、今後検討する必要がある。

都市については、スールコータダー、カーリーバンガン、ロータルなど地方都市の発掘を通し、文明社会の地方差・地域差が改めて認識されてきた。遺物についてみると、銅・青銅の使用が、初期インダス期に比して激増する。また、初期インダス期にはほとんどみられなかった金・銀の使用が明瞭となる。石器やビーズの製作技法は、初期インダス

期のそれを継承している。土器（ハラッパー式土器）は、バルーチスターンの彩文土器と、インダス水系東部域の土器とが、混淆してできたものである。土器の製作技法は、バルーチスターンの技法に類似している。

カーリーバンガン発見の「火の祭祀址」は興味深い。そこでは火の祭壇、沐浴場、犠牲獣骨が発見されている。火の祭祀址は、文明に地方的な信仰や儀礼があったことを示している。一方、この儀礼が、後世のインドでみられる、火に対する信仰と連関を持つか否かは、不明である。

C_{14}測定値では、文明の存在した期間は、前二五五〇年頃～前二〇五〇年頃とされる。一方、メソポタミア側の資料にインダス文明をあらわす記述がみられるのは、前二三五〇年頃～前一七〇〇年頃である。両者のいずれに拠るべきかは、今日なお未解決である。

第Ⅲ部　インダス文明の遺産

第九章　インダス水系およびガンジス水系におけるインダス文明の余波

前三千年紀末以降、南アジア各地は、インダス文明の崩壊と相前後して、変動期に入る。バルーチスターンやインダス水系の北西部では、従来の土器伝統が途絶したり、墓制に変化がみられたり、外来の遺物があらわれたりするといった事象、すなわち、イランや中央アジアからの移住民の到来とその影響をうかがわせる事象が広範にみられる。一方、パンジャーブ、北部ラージャスターン、ド＝アーブにかけては、文明末期以後、バルーチスターンにみられたような文化要素と、土着の文化要素とが混淆し、融合する様相がみてとれる。この地域は、後のインド文明の揺籃の地の一つであり、著者は「北の核地域」(The Northern Nuclear Region) と呼んでいる。「北の核地域」の西半分では、インダス文明期から、後期ハラッパー文化、赭色土器文化期をへて、彩文灰色土器文化の成立にいたる、一連の層序関係が確認されている。

「北の核地域」の東部域と、ガンジス流域では、埋蔵銅器文化が展開する。埋蔵銅器文化についてはなお不明な点が多いが、銅器と赭色土器が共伴する例も知られる。またいくつかの遺跡では、赭色土器文化層につづいて、黒縁赤色土器が出現する。インダス文明圏の南部域では、外部からの刺激は少なかったようである。グジャラートでは、インダス文明の技術伝統は長く保持され、やがて土着の文化へと移行する。

第十章　インド半島部におけるインダス文明の余波

タール砂漠の南、南部ラージャスターン、マルワーなど

を「南の核地域」(The Southern Nuclear Region) とする。「南の核地域」は、中央インド、南インド各地に強い文化的刺激を与えた。ここでは、インダス文明と直接関係を持たない、バナス文化とマルワー文化、二つの金石併用期の文化が、前三千年紀後半から前二千年紀前半にかけて展開した。マルワーを中心とした地域の文化展開では、コムギ、オオムギに加え、マメ、キビの栽培がみられ、さらに後にアマがみられることが注目される。また墓制では、合せ口甕棺もあらわれるが、これは南インド鉄器時代にみられる陶棺の先駆である。

南インドの前三千年紀以降の文化展開は、新石器文化の確立以降、金石併用期をへて鉄器時代にいたるまで、連続性が認められる。金石併用期の文化は、「南の核地域」のそれと類似している。農耕では、多種のマメ類がみられることが注目される。また、前二千年紀後半には、ウマが存在したと考えられる。

第十一章　インド=アーリヤ語族の到来とインド=アーリヤ語の拡がり

前三千年紀後半から前二千年紀の動向を検討すると、前二千年紀初頭かそれをさらに遡る時代に、アーリヤ語族到来の第一波があったとみることができる。つづいて、前一五〇〇年頃以降の二、三〇〇年に第二波の、さらに前一三〇〇年頃から前六〇〇年頃に第三波の到来があったと推定される。ただその際、第一に、南アジアの各地にはアーリヤ語族が到来する以前から定住農耕村落が存在し、その人々や言語は、アーリヤ語族の来住以後も存在しつづけたことに留意する必要がある。また彩文灰色土器、ウマ、墓制などの文化要素はアーリヤ語族のものとされているが、その製作・使用者は必ずしもアーリヤ語族であるとは言えないことにも、留意すべきである。

第十二章　鉄器時代とインド文明の興隆

鉄器使用の始まりから普及にいたる過程は、以下の三期にわけられる。すなわち、(I期)前一三〇〇年～前一〇〇〇年頃。最も早い鉄の出土例は、「南の核地域」のアハールである。やや遅れて、インダス水系と、「北の核地域」の一部にその例がみられる。(II期)前一〇〇〇年～前八〇〇年頃。北インド、西インド、中央インドの各地に鉄器が普及する。(III期)前八〇〇年～前五〇〇年頃。中央ガンジス流域、ガンジス・デルタ、その他の地域にも鉄器があらわれる。多くの地域で、鉄器は黒縁赤色土器と共伴する。それにたいし、彩文灰色土器と鉄器との関連については、ガンジス上・中流域の地域的問題に限定して語るべきもののよ

うである。

第Ⅲ期では「北の核地域」とガンジス流域に、都市が成立する。インド文明の開花である。この時期にあらわれる北方黒色磨研土器については、彩文灰色土器が発展したものと考えられる。両者には、製作技法、器型など共通する部分が多く指摘される。

一方、南インドでは、前二千年紀末から数百年間にわたり、巨石文化が展開する。巨大な甕棺、陶棺、ストーンサークルを伴う土壙墓、シスト、岩を穿った墓室など、その形態は多様である。これら巨石墓は、副葬品として、黒縁赤色土器と鉄器とを伴っている。鉄器のうち斧は、シャフト=ホールを持たないもので、北インドのそれとは異る技術伝統の存在がうかがえる。

第十三章　亜大陸の統一性と地域的多様性

本書の結論部である。

以上で本書の内容紹介を終わる。著者は、定住農耕社会の確立と、その生活様式の拡散および伝播を、南アジア先史の底流として理解し論をすすめている。

時に、文化現象のうえからは、農耕社会が目立たなくなる時期がある。しかしながらそれは、定住農耕社会の拡がりという流れが消滅したことを意味しない。その意味で、たとえば、インダス文明崩壊後の約一千年間も、けして歴史の退行・逆行の期間とは言えなくなる。その期間を通し、定住農耕という生活様式は、さらに亜大陸各地に拡がっているのである。もとより、定住農耕社会は、単独に存在したのではなく、そこでは、遊牧社会や農耕以前の段階の社会、そして外部からの来住者集団などが、相互に影響しあい絡みあっている。こうした様相を、著者は、南アジア社会の歴史的特質として把握する。従来、南アジア先史研究の上では、この絡みあいの複雑さをことさらに強調するあまり、全体像の把握に至らない論議がままみられた。南アジア先史の全体像を描くという点において、本書は、こうした弊害をみごとにのり越えている。

次に、本書の中で注意を払うべき点について述べておきたい。

まず、考古学的「文化」が、従来よりいっそう幅広い概念でとらえられている点があげられよう。たとえば、バルーチスターンの彩文土器諸文化（クッリ、クエッタ、ゾブなど）が、個々別々の「文化」として把握できるか否かについて疑問をなげかけているし、さらにまた、前二千年紀前半のジューカルにみられる様相についても、ジューカル文化と規定することに疑問をなげかけている。この著者の

立場が最も強くあらわれているのが、第五章「初期インダス期」であろう。ここで著者は、アムリ文化、コト=ディジ文化といった従来の表現をさけて、初期インダス期の諸遺跡の様相という扱いで、アムリやコト=ディジを観ている。

著者は、「文化」とはいくつかの「文化要素」、すなわち、技術的・社会的・宗教的側面の重層的構造より成り立つと理解しているようである。この視点にたつならば、彩文土器は「文化要素」の一つであり、「文化」そのものではないとされる。この認識は、当然、支持されるべきものと考えられる。ただその際、文化要素の重層的構造について今日よりさらに緻密な検討が必要となるであろう。本書では、まだ予察の段階の論議にとどまっているように思われる。今後に期待したい。

この「文化」の理解は、『インド文明の誕生』の段階での、著者の「文化」理解とは異なっている。著者の視点の変化を考えるならば、第一章で研究史がきわめて簡便な扱いしかされておらず、また一九七〇年代以降に限定して述べられている点に不満が残る。七〇年代以前の研究をも含め、新たな視点で論ずべきであろう。

同様のことが、「初期インダス期」の扱いについても言える。かつて著者は、インダス文明に先行する諸文化を、「先ハラッパー諸文化」として位置づけていた。その理解が撤回された理論的根拠をやはり呈示すべきと考える。「初期インダス期」として、文化動向は把握されたとしても、最大の問題である「都市形成」・「文明成立」の問題は、なお不明のままであり、かつての「先ハラッパー諸文化」説で説明されなかった課題は、棚あげされたかたちとなっている。読者には、先ハラッパー諸文化と初期インダス期との差異が、具体的に感じられないのである。

その他、中石器時代と新石器時代の概念規定および移行の問題に関して不鮮明な扱いである点、インダス文明期の交易に関してテペ=ヤヒヤ、シャーリー=ソクタなどイラン高原中南部の遺跡についてほとんど触れられていない点など、個別には今後の問題とすべき点が指摘される。

しかしながら、壮大な南アジア先史を、論理的な脈絡を保ち描ききった書として、本書がすぐれた概説書であることは言うまでもない。特に、「北の核地域」「南の核地域」の設定は、単に考古学の分野にとどまらず、古代史その他の分野にも大きな影響を与えることと思われる。今後、本書をふまえた各方面での論議がなお一層期待される。

(Bridget and Raymond Allchin, *The Rise of Civilization in India.* Cambridge University Press, London, 1982. xiv + 379p.)